



街の緑が色鮮やかになり、まぶしく感じる季節となりました。
新しい何かに挑戦したくなる季節ですね。
今回はそんな季節にぴったりな「**アジア未来学校開校特集号**」
です。
3月の中旬に開校した新しい学校についてみなさまにお届けし
ます！

アジア未来学校 二校目 開校 !!

前号でお知らせしたとおり、3月14日にアジア未来学校第二校
目の開校式が行なわれました。その模様と学校についての最新
情報をみなさまにお届けします。

~ CONTENTS ~

- 1 アジア未来学校の開校式の模様
 - a 開校式によせて(禹代表)
 - b 開校式の様子(現地駐在員より)
 - c ロータリークラブ様のご挨拶(要約)
 - d アンロンコン村・学校について
- 2 スタッフ・スタディーツアーについて
 - a 行程
 - b 参加者の感想(韓国スタッフ)
 - c 参加者の感想(日本人参加者)
- 3 千代田女学園さんの寄付と経緯
- 4 事務連絡



< アジア未来学校の子どもたちと一緒に！ >

開校式の模様

3月14日、開校式は乾季のカンボジアらしい暑い空気、強い日差しのもと大人も子どもも村中の人々が参加し賑やかに行なわれました。

今回の開校式はカンボジアスタイルにのっとり行なわれたので、まず初めに来賓がいらっしゃったら花輪のプレゼントです。その後、席について式のはじまり。今回学校建設に多大なご協力を頂いた日本と韓国のロータリークラブ(以下RC)のみなさまをはじめとし、プノンペン副局長からもご挨拶をいただきました。(挨拶文・来賓一覧は次頁を参照ください。)

次に代表の禹とカンボジア駐在員の安田が挨拶をし、その後プノンペン市から感謝状とメダルを頂き、最後に、日本・韓国・カンボジアのそれぞれの出席者代表が赤い大きなリボンテープにはさみをいれ、無事開校式が終了しました。

ざっと式の流れをお伝えすると数行ですが、実際は朝8時半からお昼までと長い時間かかりました。それもそのはず、みなさんの挨拶は全て同時通訳がつかしました。そのため、通常の2倍の時間がかかってしまうのです。しかし、その様子が、まさに国を越えたものなのだなと実感しました。

さて、その間の子ども達かというと、そわそわしながらも、列をくずさず真剣に話を聞き、テープカットが終わって学校に入ってもいい状態になると、みんな飛ぶように階段をかけのぼり、教室に入っては出て、机を触ったり椅子に座ったりの繰り返しです。中にはもう授業のまねっこをしている子ども達もいました。

開校式を振り返って思うのは、開校式は学校が始まる第一歩でしかないということです。これから学校がどのように進んでいくのかは、わたしたち、村の大人たち、そして子どもたちにかかっているのだと思います。「学校」という枠組みができた今、教育の中身に重点をおいて取り組んでいこうと思います。(樋口)



<開校式直後さっそくすわり心地をチェック！>



<開校式に集まった村のひとびと>



<プノンペン市よりメダルと賞状を授与される安田現地駐在員>



<テープカット！いよいよ学校のはじまり>

アジア未来学校開校に寄せて 禹代表

日韓に新たにやってきた新春の清風がカンボジアに更なる希望の木を植えました。皆様のおかげで、3月14日カンボジアに第2のアジア未来学校が開校できたのです。数々の山も谷もありましたが、着実に固まりつつある日韓の強い絆には勝てませんでした。

韓国には“半分をもって初めとせよ”という諺があります。何ごとも始まりまでが最も大変だという意味で、まさに始まったばかりの第2の学校こそがこれに当たるのではないかと思います。

学校を運営していくのも決して容易ではないと思いますが、アジアに愛を植え、育てていこうとする皆様の尊いお気持ちを励みに、粘り強くやって参ろうと存じます。私たち日韓両国のスタッフは、今後とも皆様の尊いお心のメッセンジャーとして頑張らせて頂きたいと思いますので、どうぞ、もっと身近で見守って下さいませようお願いいたします。

(禹 守根)

開校式の様子 ~カンボジア駐在員の報告~

2003年3月14日、第2のアジア未来学校が、プノンペン市ドンカー区アンロンコン・タマイ村において開校されました。式の前日にはなっても建築の仕上げ段階で未完の部分があったこと、参加者が当初の予定より多くなり、それぞれの所属機関、団体間に全ての連絡が行き届いていなかったことなど、細かい問題はありませんでしたが、当日までには全ての問題が解決され、無事に開校式を迎えることができました。

式自体は全てカンボジア様式で行われましたが、スピーチをクメール語と英語で行なうなど、国際色豊かなイベントとなりました。日韓カン三カ国から参加のスタッフ、支援者の方、アンロンコン村民、そして国連や他国のNGOなどカンボジアでの開発に関わる方のご参加もあり、このような教育の事業が国を越え、全ての大人の責任で行われるべきという私たちの信念に見合う内容であったと思います。これまで違った場所から、様々な形でご協力くださった全ての「アジア市民」、「地球市民」の気持ちが1つにまとまったような、そんな瞬間でした。

未来学校の主役となる子どもたちや、そのご家族の参加もありましたが、できあがったばかりの校舎を前に、これから始まることへの期待で胸を膨らませている様子がとてもよく伝わりました。(中には、一体何が始まるかとしているのかわからずとも、とにかく新しい何かが始まるということでワクワクしていた子もいたようです。)
「オークン」(ありがとう) そんな言葉をあちこちで耳にしました。これは、これまで学校の準備のために村へ何度も足を運ぶ中でも、よく耳にした言葉でもあります。

カンボジアスタッフは私を含め3名で、この人数で全てを取り仕切ることはかなり大変でしたが、プノンペン市教育局を始め多くの方のご協力でなんとか無事に式を終えることができましたと思っています。局の皆様、そして、朝早くから、また暑い中ご参加いただいた皆様には感謝の気持ちでいっぱいです。そして、式にご参加いただけなかった多くの支援者の皆様にもお礼を申し上げたいと思います。

この式はあくまでスタートであり、何よりもこれからが一番大切なところです。今後も皆様の暖かいご協力、ご支援のほど、よろしく願いいたします。

(安田 理裕)

ロータリークラブ様 祝辞

日本ロータリー訪問団 代表 大阪住吉ロータリー・クラブ 国際奉仕委員長 瀧口 利章様 ご挨拶

この「アジア未来学校」と私共の係わり合いの始まりは、昨年2002年2月1日の日本経済新聞「春秋」-論説欄の記事を見た事に始まります。その内容は、カンボジア・プノンペン市の郊外で、就学出来ない子ども達のために識字教育をするため、日本と韓国の学生が協力して行っている活動を、アジアの若者達の新しい潮流として高く評価したものでした。

2002年3月21日東京で「日韓アジア基金」代表の禹守根君と高橋政行君に会って活動状況を聞きました。世界社会奉仕活動(World Community Service)の対象を探していた我々にとって、「アジア未来学校」は非常に適したものであるという判断を致しました。そして昨年6月に当市(プノンペン)を訪問し、最初の「アジア未来学校」を禹君と安田理裕君の案内で参観し、子供達の真剣な学習態度と集中に感動致しました。早速姉妹クラブである「ソウル中央RC」の賛同を得て、学生達と同様に日韓協力での活動計画を行うことになったのです。日本側でも兄弟クラブである、大阪のRC三団体の参加ご協力を頂くことになりました。我々の活動の意図は、単に資金を提供するだけでなく、一緒に援助を企画し、共に汗も流すこと、そして計画の達成に感動と喜びを共にすることを基本としました。ここにいたるまでの経過は決して平坦なものではありませんでした。「日韓アジア基金」が学生達だけの運営で、組織が極めて脆弱なことや、最初の「アジア未来学校」の挫折、校舎建設を中心に援助を決めるまでの我々の側の悩み、安田君の交通事故による負傷など、数々の思わぬ不測の出来事がありました。しかし多くの方々とそれらを克服して本日の開校式を迎えることができました。「アジア未来学校」がアンロンコン・マタイ村の児童達に学習と憩いの場として喜ばれ、それが彼等の将来への成長に役立てば、我々の喜びはこれにまさるものではありません。

～開校式来賓出席者～

大阪住吉ロータリー・クラブ
大阪天王寺ロータリー・クラブ
大阪阿倍野ロータリー・クラブ
大阪南西ロータリー・クラブ
ソウル中央ロータリー・クラブ
プノンペン市副市長(副局長)
駐韓カンボジア大使
AMADE(フランス NGO 団体)
カンボジア駐在員
(略敬称)

ソウル中央ロータリー・クラブ 朴 泳求 会長 ご挨拶

私は朝鮮戦争がはじまった年に生まれ、ちょうどあなたたちの年頃の1958年から小学校に通いはじめました。その頃、私の国大韓民国は十分な電気もなく、工場や家などの建物少なく、地方の農家では栄養失調の子供を育てるための十分な食物もありませんでした。

特に米、麦の収穫前の3、4、5月には、ほとんどの地方の人々は厳しい飢えに苦しんでいました。

しかしながら、都会に住む人も、農家、労働者、軍人も、大統領の強いリーダーシップの下に団結し、今では、子ども達が飢えに苦しむこともなくなり、経済も発展しています。

私はこれからカンボジアが経済の面だけでなく文化的、精神的な意味でも強い国になるだろうと強く確信しています。最後にアジア未来学校の子供達へ西洋のことわざを送ります。" Boys, be ambitious ! " (「少年よ大志を抱け！」)



学校運営費の大口匿名ご寄付

今回の第二校開設に当たり、私たちが資金面で悩んでおりましたのは、建物の建設費と、その後の運営費の二つでございました。

建物については前述のように、韓国、日本のロータリークラブ様の全面的なご協力で解決致しましたが、開設後の運営費については目処が付いておりませんでした。そこに、ある方から亡くなられたお父さまのお名前で、運営費の半年分強に当たる多大なご寄付のお申し出があり、当面学校の運営を支障がなく始められる事になりました。

ご本人とご家族のご希望で、お名前はお出し出来ませんが、ご寄付下さったお考えと経緯を頂戴したお手紙の一部を引用させて頂くことでご報告いたします。

1 先ず、お申し出頂いた時のお手紙です。

「私も以前よりカンボジアに学校を建てたいと考えていましたが、何の力もなく何も出来ませんでした。お蔭様で、私は十分な暮らしが出来ておりますので、父が亡くなった時頂いたものをお役に立てたいと考えております。」

2 その後アジア未来学校の子どもたち向けに、お父さまがどんな方であったかのメッセージを頂きました。

「K じいさんは心が広く、優しく、何事にも前向きで平和を愛する人でした。

生まれた時から目が悪く、60歳位で何も見えなくなってしまいました。でも、その後もテープレコーダーに書類を録音して貰い13年間も働きました。

そのお金で、皆さんが勉強してくれることを大変喜んでいることと思います。

そして自分のためだけでなく、人のためにも役に立つ人間に育ててくれることを心から願っていると思います。」

このようなお考えで第二校のために多大なご寄付を頂きました。

改めて紙上を借りて厚く御礼申し上げます。

(大澤 龍)



アジア未来学校とアンロンコン・タマイ村について

～ アンロンコン村について～

プノンペン市郊外のアンロンコン・タマイ村。ここは、よそで集団火災に遇った人たちのために市が開発した場所で、二年前にできたばかりの村です。従って、全ての面で生活基盤が整っておらず、特に教育については、公立学校に通えない子どもが多く、最低限の識字教育(読み、書き、算数)だけでも、と求められています。雨季になると浸水してしまう地域なので、学校は高床式にし、避難所を兼ねています。

< 村の就学状況(02年11月現在) >

就学適齢児童数: 502名

内就学児童数: 302名

未就学児童数: 200名

四割もの児童が何も教育を受けていない。

～ 学校概要 ～

< クラス >

25人/クラスを4クラス

(午前・午後二部授業)

< 校舎 >

木造高床式平屋建て約80m²

教室数: 2部屋

< 採用教程 >

カンボジア教育省制定の識字教育教程

< 教育期間 >

1年から2年間

< 学校卒業後 >

村から2km程離れたとなり村にある公立の小学校に編入学します。



< 学校に一番近い井戸 >



< 未来学校の全体図 >



< 何にでも興味津々な子ども達 >

スタッフ スタディーツアー ご報告

3月14日の開校式にあわせて、日韓スタッフとその関係者、計6人がスタディーツアーに参加しました。

< 行程 >

- 3月11日 日本(成田空港)出発、バンコクを經由し、夕刻カンボジアの首都プノンペンへ到着
3月12日 AM プノンペンの隣州にあるコンポスプー州で活動する現地ユニセフの活動を見学
PM プノンペン 市内観光
3月13日 AM プノンペンで孤児院の青少年育成活動をしているJICAの活動を見学
PM アンロンコン・タマイ村へ訪問。

アジア未来学校の建設状況確認、その後未来学校卒業生が行く予定の隣村の公立小学校視察

- 3月14日 AM アジア未来学校 開校式
PM 自由行動(ポルポト時代の刑務所:トゥールスレン博物館等見学)
3月15日 終日 自由行動 夕刻 シェムリアップへ向かう。
3月16日 終日 シェムリアップにて、アンコール遺跡群見学
3月17日 AM シェムリアップ郊外にて井戸掘りなどの活動をしているNGO見学
PM 自由行動
3月18日 AM アンコール遺跡群見学
PM 地雷博物館、シェムリアップで活動しているNGOの活動現場見学
夕刻 シェムリアップ 出発、バンコクを經由する。
3月19日 早朝 成田空港 到着



< アンコールワットを背に。 >

今回のスターディーツアー(以下ST)は開校式に出席するというを中心、カンボジアの実情を肌で知ること、カンボジアで活動している他援助団体を見学し勉強するというを目的に組まれました。

今までスタッフとして関わっていながら、書籍や人からの情報でしか知らなかったカンボジア、アンロンコン村の子ども達や村の様子、公立学校の抱える問題と現状、そしてカンボジアで活動することの大変さを短い期間ながら垣間見ることができました。

特に今回のSTで勉強になったことは、学校の運営のあり方です。プノンペン付近では公立学校は思っていたよりも

たくさんあります。(多くの学校が二部授業で、決して十分とはいえませんが。)しかし、問題は「中身」です。教える側の教育に対する知識の不足、図書不足、子ども達がなぜ学校にいかなくてはいけないかが大人も含めてあまり理解されていない、など外枠よりも中身の部分に力をいれなくてはいけないと改めて実感しました。また、もう1つの収穫は、韓国側のスタッフとともに行動できたことです。ことばの壁は多少あったにせよ、同じものを見、聞き、考えるというのは、「国」という枠を取り外します。同じ時間を共有し、未来学校のプロジェクト現場を一緒にみることができたこと、その夜にどのようにこれから日韓が活動していけばいいのかを話し合ったこと、これこそが私たちの目指す「協働作業」なのだなと感じました。

(樋口督水)



< 3日目に見学した孤児院にて >

以下韓国スタッフと日本スタッフの感想文をご紹介します。

韓国側参加者の感想

こんにちは。私は韓国側メンバー、チョン・ヘジです。去る3月14日はカンボジアに私たちが建てた第二未来学校の開校式でした。日本側はSTとしてスタッフ数名と一緒にプノンペン(カンボジア)へ行くというので、“韓国側からも誰か行かなくちゃ”と悩んだ末に私が行くことになりました。実は今回は個人旅行も兼ねて早くから韓国を出発していたので連絡がうまく行かなくて、カンボジア駐在の安田さんや日本側のみなさんに心配をかけましたが3月11日夜にようやく会えました！日本メンバーは五人！それなのに韓国からは一人で、はじめは気後れしていました！（日本語の勉強を怠けたことを後悔しました。）

初日はほんの短い時間だけお話しして就寝。そして二日目になりました。二日目はコンポンスプ州の教育オフィスとユニセフのオフィスを訪問し、ユニセフの学校建設現場にも行って見ました。そして三日目の朝はJICAが協力している社会施設を見学し、午後になっていよいよ私たちの未来学校があるアンロンコン・タマイ村に到着しました。

アンロンコン村は思ったより清潔(!?)で、大きな村でした。皆、家を藁でつくって暮らしていましたが、私たちが持っているコンピューターどころか電線はどこにも見当たりませんでした。もちろんシャワーもなかったし、ご飯を炊くには数ヶ所しかない井戸から水を運んでこなければならず不便そうでした。

そのような所に、AFS(アジア未来学校)は村の南西の方に建っています。

実は開校式は翌日なのですが、学校は未完成な部分が数ヶ所残っていました。そういうわけで子ども達も村の人々も皆熱心に働いていました。

子ども達は学校が完成するのを待ちながら、他団体が行っている野外教室で勉強していました。

聞くとところによると、毎回人数は違いますが、150人ぐらい集まるのに、机に向かって座れる席はわずか30席。＜韓国スタッフチョン・ヘジと子どもたち＞そして新たに建つ学校は2部屋の高床式教室。

うーんそれじゃ一体そのたくさんの子供達はどこに座るんだろう...？

翌日朝早くまた訪ねた村。今日は開校式だというので、村中が騒々しく沸き立っています。子ども達は嬉しそうに居並び、村の人々も開校式に参加しました。

新しくできた学校は皆とても珍しかったようで、式が終わるや否や皆駆けつけて机に座ってみたり窓辺にぶら下がってみたりする子供達は、本当に澄んだ目をしていました。目があうたびに「にっこり」と笑うほほ笑みがみんなとても可愛かったです。（その時レゲエ頭をしていた私の頭を皆不思議がって人気者になったり！ 写真参照）

しかし、子供たちが面倒を見ているその弟妹たちは、服も満足に着ていなくて、ある赤ん坊は皮膚病でしたが、治療されてなくて膿んでしまっているのを見





< アンロンコン村の住居 >

した。とても短い時間でしたが、今でも子供達の顔がありありと記憶に残っています。机も先生も本も鉛筆も皆不足していますが、私たちの努力で子供達が少しでも勉強できるようにと学校を建て、それを直接見ることが出来たことは本当に私にとって貴重な経験でした。次の機会にはもっと多くの韓国メンバーと日本メンバーが参加して一緒にこの気持ちを分かちあえたら良いですね。

(チョン・ヘジ)

日本側参加者の感想

初めてボランティアというものに参加した。今回は現地の状況を知る事を目的としたツアーでもあった。初の海外だったので初めは戸惑いもしたがいろんなものを自分で見て、実際に触れ合っていくうちにたくさんのお話を学ぶことができた。



< 佐藤君のプレスレットに見入る子ども達 >

カンボジアというと、汚い、治安が悪い、そして地雷という様なイメージがあった。首都のプノンペンに着いたときは、やはり治安悪そうだし、歩道で普通に人が寝転がっていたりと、イメージどおりで、あまり来たくない場所だと思った。しかし、現地で働いている安田さんや、その周りで働いている現地の人達、学校の子供たちを含め、いろんな人と出会い、また来てみたい、また来てもっといろんな事を経験したいと思った。今回のツアーで一つ学んだことは、「物事を近くで見るとよく見え、物事を遠くから見るとその物事の全体が見える」当たり前の事だけど、なかなか難しいものだと感じた。

カンボジアはイメージと全然違って、多分この国だけではないと思うが、同じ場所で、同じ生活をしてみないとわからないものがたくさんあった。イメージだけで終わるのではなく、実際に自分の目で見て経験してみるのもいいと思った。日本程便利ではないかもしれないが、不自由なく過ごせる場所なのだと知ることができた。

国と国の間には国境があるが、人と人之间には何の境目もないということも同時に感じた。一週間という短い間でしたが、一緒に参加できてよかった。

(佐藤 雅俊)

千代田女学園 ご寄付お礼とその経緯

以前から千代田女学園さんはボランティア部のみなさんを中心に学校を挙げてアジア未来学校を応援していただいております。この度開校式ということで、文房具100人分を集めてプレゼントしていただきました。その活動の中で、私たち日韓アジア基金のスタッフも一緒に考えさせられた「物品の援助について」ご報告いたします。

一昨年、学校のご好意とボランティア部のみなさんの頑張りで、段ボール箱20箱以上の文房具と衣類、そして送料としてのお金の寄付が集まりました。その後、当時現地カンボジア事務所がまだできたばかりで受け入れが難しかったこと、日韓アジア基金が未来学校第一校目から手をひくことになったこと、等が重なり長い間学校の方へ保管していただく形となっていました。そして、今回第二校目も出来上がり、送ろうとしたところ、カンボジア現地サイドから以下のような問題を投げかけられました。

多すぎる無償援助は、現地の人の自立の妨げになる。

暖かい土地のため、衣類などはあまり必要がなく、あたえられても売ってしまう。

文房具は必要だが、多すぎても保管場所がない。

(学校は教室のみで倉庫はなく、教室に置いておくと盗難にあう。駐在員の住居も狭い。)

また、現地の文房具は非常に安いので、文房具を送ることで、現地のものが売れなくなる。

(現地の産業の成長の妨げになる。)

ということです。私たちは当たり前のように、「物を送ることは良いことなんだ」と無意識に思っていることに気づかされました。この現地からの「問い」を受け、スタッフ内でも話し合い、また千代田女学園のみなさんとも一緒に考えました。簡単に「援助」と言っても、物資を送るだけでは済まないこと、現地の経済や自立を妨げる恐れもあること、現地では「援助」が「利益」に結びつく場合があること、などわたしたちは今回の経験から多くのことを学びました。

その結果、文房具100セット(ノート、鉛筆、ペンなど)を第2アジア未来学校へのプレゼントとし、残りの物品は災害地など緊急援助先へ物資を送っている他のNGOに寄付することになりました。千代田女学園のみなさま、本当にありがとうございました。(樋口督水)



< アジア未来学校の子供達へ! >

< 千代田女学園ボランティア部のみなさんのプレゼント仕分け作業 >

千代田女学園ボランティア部 部長の土田さんより今回の「物品寄付」についての感想をいただきました。

「物資を寄付するとはどういうことなのか」

千代田女学園高校2年 土田裕子

私は今まで、物が不足して困っている国の人たちは、私たちが寄付した物はどれも喜んで使ってくれているのだと思っていたし、そういう人達に何かを寄付することは、とても簡単なことだと思っていました。しかし、今回部活で物資を集めてみて、何でもかんでも送ればいいわけじゃないことを知って、とても驚きました。何と、もらってもお金になりそうな物はお金に換えて、そのお金を生活費にして暮らしている人達がいるのだそうです。だから、ちゃんとその国の現状を把握して寄付しないと、自立しないで援助物資に頼る人が出てきてしまって、大変なことになってしまうのだそうです。

だけどころか人達ばかりではないみたいです。中には「哀れまないで」と思う人もいて、もらってもあまり喜ばない人もいるというのも、現実なんだそうです。私は、まるで電車の中で目の前の年寄りの人に「どうぞ」と言ったら、迷惑そうな顔で「まだそんな年じゃないわよ」と言う人もいるかと思えば、私が立ったのをいいことに勝手に座る罔々しい人もいて、結局譲ってよかったんだか悪かったんだか、という微妙な気分と少し似た気持ちになりました。

でも、使ってくれる人もちゃんといるので、寄付するときは、ボロボロになっていたりシミがついたりしている物は送らない方がいいと思いました。「いらないから使って」という感覚で、物を処分するかのようには寄付するのも、失礼だと思いました。しかし、ここで気をつけなければいけないのは送りすぎです。送りすぎると、その国でつくられる物が売れなくなって商売の邪魔になってしまうし、送料もたくさんかかってしまうからです。

今回、部活でこういう活動をして、とても勉強になったとしみじみ思いました。



< 千代田女学園ボランティア部のみなさん >



< プレゼントを一つ一つ丁寧に包装中 >

